

ビジネス経済学パッケージで
勉強できること

「パッケージ」とは？

- 大学では、どの科目の授業を受けるかは自分で選ぶことができます。
- そのため、高校で言えば「毎日、漢文と物理ばかり勉強する」というようなことも可能です。でも、そういうことをすると、大学入試を受けるときに大変ですよ。
- そこで、「大学で物理をやりたい人には物理と数学」というように、将来を考えて組み合わせの良い授業をまとめたものが「パッケージ」です。

企業と消費者とマーケットの分析

- 「経済学」というと、どんな勉強をイメージするでしょうか。商品の売買などに関わるものだというイメージはあるかと思います。
- 消費者の選択や、企業の生産活動、彼らが出会うマーケットで起こる現象を分析するのが、ミクロ経済学です。大抵の経済活動にはこれらが関わっているので、他の多くの科目の基礎にもなっています。
- ビジネス経済学パッケージは、このミクロ経済学などとそれを応用する科目を中心に構成されています。
- 以下では、それぞれの科目について説明します。

利害の一致しないもの同士が 一緒に行動するとどうなるか

- マーケットでは、消費者と企業とがお互いの利益になるような取引を行います。
- しかし、同時に、企業同士は自分の会社がいかに多くの利益を得るかを競い合っています。
- 企業の間に限らず、同じ企業で働く社員同士、あるいは、上司と部下も、利害の対立がありながらも共に活動しています。
- このような状況で、彼らの採るべき選択やその結果を数理的に分析するのが**ゲーム理論**と呼ばれる分野です。これもビジネス経済学パッケージを構成する科目の一つです。

産業組織論a

経済学では、一般的な話として「市場競争が活発ならば、商品やサービスの価格は低下し、品質の高いものが提供される。また、非効率的な企業は市場から締め出され、効率的な企業が生き残る」とされている。そして、活発な市場競争を実現するためには、「市場に参加する企業の数が多いほど、また、企業の規模は小さいほど望ましい」とされている。では、次のようなケースは、どう考えれば良いのだろうか。

- バッグや靴などは、ほとんど同じ品質の商品でも、ヴィトンやプラダなどの商標がついていれば、価格がとんでもなく高い。これは競争が不活発なためか。
- 公共工事の入札では、清水建設や大林組など大手ゼネコンはほとんど同じ見積の価格を提示する。競争しているのだろうか。
- 板ガラス業界は、50年以上にわたり日本板硝子50%、旭硝子30%、セントラル硝子20%というマーケット・シェアが変わらない。競争しているのだろうか。
- ビール業界は、戦後30年間、麒麟、アサヒ、サッポロの3社体制だった。1960年代に宝酒造がビール業界に参入しようとしたが失敗した。しかし、70年代にサントリーは参入に成功した。なぜか。

こういった現実の問題を、経済学の知識を使って解いてみよう。

産業組織論b

1980年代の後半から、さかんに規制緩和が叫ばれるようになり、この流れは現在まで続いている。国鉄はJRに、電電公社はNTTに、専売公社はJTに民営化され、公益事業という理由で厳しい政府規制のもとにあった金融や運輸、最近では電力も規制緩和の対象になっている。経済学は「規制を緩和すれば市場競争が活発になり、結果として社会の利益は向上する」と教えるが、次のようなケースはどうだろうか。

- 国内電気通信事業は、当初、NTT、京セラ系の第二電電、東京電力系会社の3社体制から始まったが、現在はまったく違った体制の業界になっている。なぜか。
- 国内航空輸送は、日本航空、全日空、東亜国内航空の3社体制が、規制緩和後、全日空の一人勝ち状態になった。なぜか。
- 銀行業界は、規制緩和後、11行あった都銀は4行に統合された。これは「企業数は多いほど、規模は小さいほど競争は活発になると」という経済学の教えに反しないか。
- 規制緩和によって大規模小売店舗法は廃止された。その結果、大型小売店が全国各地に建設され、地元の小さな小売店は廃業を余儀なくされた。これは社会の利益の向上につながったのか。

こういった現実の問題を、経済学の知識を使って解いてみよう。

企業をとりまく経済環境の分析

- 企業が実際に戦略を決定していく上では、ビジネスを取り巻く環境についてよく理解していることも必要です。
- そこで、現在の、国境を越えて経済のつながりがますます強まっている、グローバル化の中の各国経済の状態を経済学の理論を用いて理解するための科目として、**国際金融論a、b**がビジネス経済学パッケージに含まれています。
- また、この科目では、各国政府が実施する経済政策が世界のビジネスに及ぼす効果について予想することができるようになることも目標としています。

グローバル取引への企業の対応

- さらに、**国際金融論a、b**では、海外との取引を行う企業にとって取引に用いられる通貨の違い(例えば、日本企業の場合、取引に使うのが日本円か、取引相手国通貨か、アメリカ・ドルか、という違い)がどのような意味を持つか、という点についても学びます。
- さらに、企業が外国通貨で取引を行う場合に発生する為替リスクに対処するためにどんな金融技術が使われるのか、という点についても学んでいく予定です。

将来の展望

- 以上に見てきたように、ビジネスを分析する基礎となる経済理論を学ぶのがビジネス経済学パッケージです。
- 前述の通り、これらは他の分野の基礎にもなっていますが、これらの勉強がより直接に生きる主な進路には、経済学やビジネススクールなどの大学院、金融業や保険業、シンクタンクなどがあります。